

弘法さん — 新茶屋 —

「おかげでさ、するりとなぬけたとさ」

と唄い、踊りながら、伊勢へ伊勢へと向かった、群衆のお陰まいり。

宝永二年（一七〇五年）にはその数四百万人ともいわれ、新茶屋の伊勢街道筋は、歩く人、かごで行く人で、それはそれは大へんな賑わいであったそうです。

大正八年秋のことです。

どうした訳か弘法さんの首がポックリ落ちたのです。

村人たちはびっくりしました。これではいけないと、あわててつなぎ合せて祭っていたのですが、ちょっとさわると又落ちてくるような状態だったので、村人たちはどうしたものかと迷っていました。

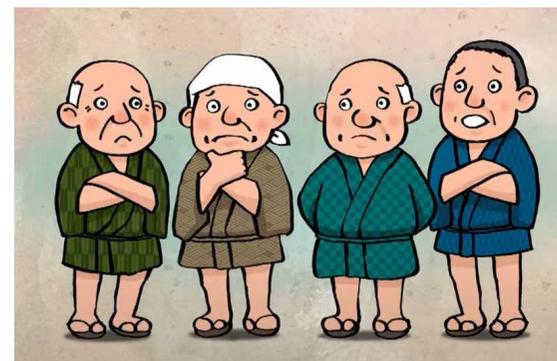
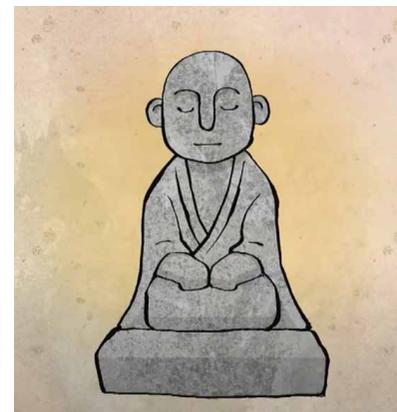
「弘法さんは道端にあるし、じゃまやでこの際土の中に埋めてしまたらどうやる。」

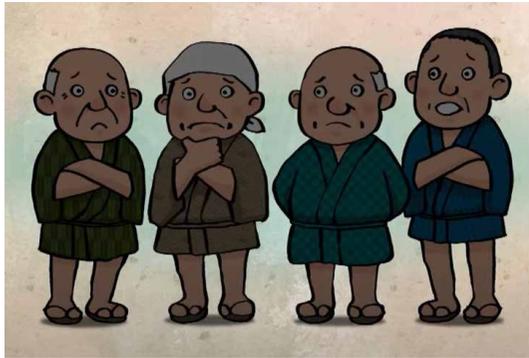
と言い出しました。

言われるように溝があり、道幅がせまいし、人の行き来が激しいので皆も黙ってうなづきました。

「そうや、土の中ならじゃまやないのう。」

と寺の住職にも供養してもらって皆で埋めてしまいました。





ところがその夜、
「じゃまだ。」
と言った村の一人がポックリ死んでしまったのです。

まるで弘法さんのように正座して一。
そのあとを追うように、作業を手伝った村人が次ぎ次ぎに死んでしま
いました。

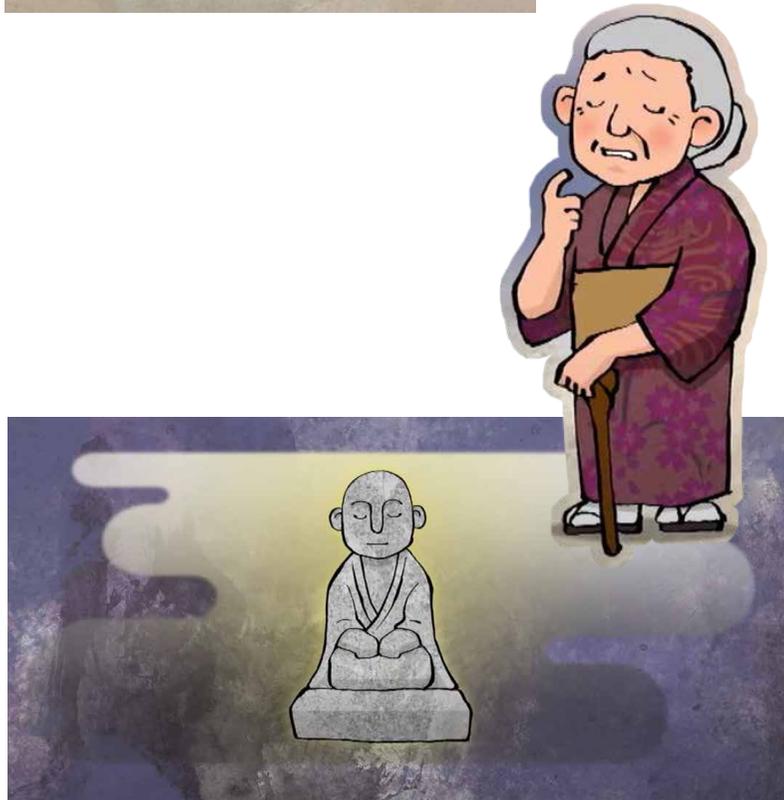
さあ、村中は大さわぎ。
「弘法さんのタタリじゃ!」
と口ぐちに言いあいました。

ちょうどその時、あるおばあさんが眼をわずらって町の医者にかかっ
ても治らないし大そう困っていました。

いく日かたった夜、不思議なことに、そのおばあさんの夢枕に弘法さ
んがあらわれて、

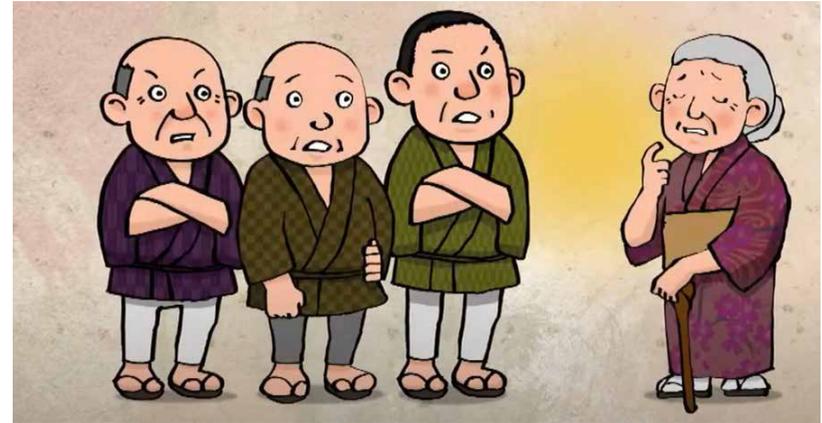
「私は暗くて何も見えない。元のところにもどしてほしい。」
とお告げがありました。

さっそくおばあさんは、このことを村人に話し、弘法さんを元にもど
してもらいました。

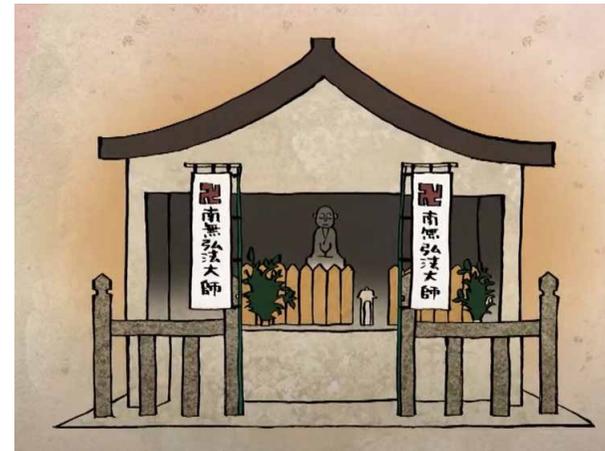


その後、おばあさんの眼は日毎ひごとによくなり、弘法さんのタタリも消えて、もとの平和な村にもどったということです。
覆堂おおいどうの中には、石仏二体と目の石仏があり、願いごとがかなえられると、新らしい「よだれかけ、を弘法さん

にかけ、お礼まいりをするそうです。



伊勢街道沿いにある弘法さんの祠



キーワード：みんな、新茶屋、伊勢街道

このお話は、昭和56年に発行された書籍『明和のみんな』（野田那智子さん編著）をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしようしています。